Museum News

秋田県立博物館ニュース

目　　次

表紙・目次……P.1
企画展紹介
（予告）企画展「鉱山の記憶（YAMA NO KIOKU）」…P.2
（報告）特別展「粋なよそおい 雅なよそおい」…P.3
企画コーナー展紹介……P.4
（報告）「探検家・白瀬矗」（秋田の先覚記念室）
（報告）「真澄図絵の特徴と変化」（菅江真澄資料センター）
学芸ノート
（生物）陸前高田市立博物館の標本レスキュー活動…P.5
（真澄）まじない歌の「不敢来」の読み……P.6
わくわくたんけん室⑳、表紙写真説明……P.7
博物館歳時記、お知らせ……P.8

表紙写真
「わくわくたんけん室」夏休み限定アイテム２種

No.153

展示予告

平成23年９月17日（土）～11月27日（日）

企画展 鉱山の記憶

YAMA NO KIOKU

院内銀山御幸坑

秋田県は金・銀・銅など貴重な金属資源にめぐまれ、かつて鉱山王国とうたわれました。そのため県内には鉱山にまつわる資料や遺跡が豊富に残されており、まさに鉱山資料の宝庫です。当時の様子を伝える絵画、古文書、写真、採掘用具などは、忘れかけた「鉱山の記憶」をよみがえらせてくれます。

秋田の大地の恵みと、人間・技術との出会いが生み出した歴史絵巻をお楽しみください。

（歴史部門　新堀道生）

展示構成とトピック

1 大地の恵み
2 院内銀山の勃興
3 金銀山から銅山へ
4 鉱山の近代
○ 縄文鉱山
○ 平賀源内の来秋
○ 阿仁鉱山召し上げの危機
○ 秋田の銭大坂を動かす
etc.

阿仁鉱山作業絵巻（部分、館蔵）
熔解させた鉱石から銅をとり出す様子。

慶長一分金（館蔵）
江戸幕府が発行した最高級品質の金貨。横手市の小学生が偶然発見した。

院内銀山真景（個人蔵）

平成23年７月２日(土)～８月21日(日)

特別展 粋なよそおい 雅なよそおい

特別展「粋なよそおい 雅なよそおい」では、江戸時代から昭和にかけての化粧やよそおいに関する道具などの展示を行いました。化粧をするという行為自体は今も昔も変わらないのですが、その方法や道具には変化があり、また流行もありました。展示の中では「お歯黒」のように現在はみられなくなった化粧についても紹介しました。

お歯黒は結婚した女性が歯を黒く染めることをいいます。これは黒はほかの色に染まらないことから、女性の貞淑を意味するとも言われていますが、実際には虫歯を防ぐ意味もあったそうです。お歯黒をするときに歯に塗る液体を「お歯黒水」といいます。これは酢酸、米のとぎ汁、柿渋、さびた鉄釘などを壺に入れて３ヶ月ぐらいねかせたものに、「五倍子（ふし）」と呼ばれるヌルデの木にできた瘤（こぶ）状になったものの粉末をまぜて使いました。ちなみに五倍子は、現在でも生薬として使われているそうです。

このお歯黒水はかなりの悪臭を放つため、誰よりも朝早く起きてお歯黒をしていたことや、お歯黒をした後は口が渋く感じられるのでうがい茶碗をそばに置いてお歯黒をしていたことなどが、お歯黒をしたことのある方が話していたそうです。また、お歯黒水は作るのに手間がかかったため、「かめぶし」など水に混ぜると簡単にお歯黒水ができるものも商品として販売されました。

お歯黒は江戸時代は盛んに行われていましたが、明治時代になると太政官布告によって皇族、貴族に対してお歯黒に対する禁止令が出され、それに伴って民間でも次第にお歯黒は廃れていきました。しかし、今回の展示では昭和53年に93歳でお歯黒をしていた秋田の女性の写真をあわせて展示しました。消えていった民俗事象の中には、つい最近までおこなわれていたものもあったのです。

展示の中ではこのほかに、佐竹氏の家紋が入ったお歯黒道具や庶民が使用したお歯黒道具なども展示しました。

（民俗部門　髙橋　正）

庶民のお歯黒道具　一式

お歯黒筆、耳だらい、お歯黒壺などがフルセットでそろっています。

（ポーラ文化研究所蔵）

秋田藩の武家に伝わったお歯黒道具　一式

お歯黒筆などに加えて紅猪口もセットになっています。佐竹氏の家紋が収納箱に付いています。

（秋田市立佐竹史料館蔵）

展示報告

平成23年６月４日(土)～７月31日(日)

企画コーナー展（秋田の先覚記念室）

探検家・白瀬矗

秋田県にかほ市（旧金浦町）出身の白瀬矗（のぶ）が率いる「白瀬日本南極探検隊」は、明治45年1月28日、南緯80度05分西経156度37分の地点に達し、見渡す限りの一帯を「大和雪原（やまとゆきはら）」と命名しました。南極大陸の貴重な情報を手に、その後全員が無事帰国したこの冒険は、世界の探検家に比肩する偉業でもありました。夢をかなえるために人生のすべてを懸けた白瀬の生誕150年、そして南極到達100周年の節目を迎え、当時の探検資料と貴重な映像を交え、白瀬の生涯と日本の南極観測事業について紹介しました。

展示は「白瀬日本南極探検隊100周年実行委員会」と連携して開催し、南極OB会や国立極地研究所から講師を招き、期間中に講演会・実験教室も実施することができました。白瀬矗の関連資料にとどまらず、南極クイズや南極観測船の模型を設置したことで、様々な世代に興味を持って貰えたのではないかと思います。

（秋田の先覚記念室　中村美也子）

展示報告

平成23年７月９日(土)～８月21日(日)

企画コーナー展（菅江真澄資料センター）

真澄図絵の特徴と変化

菅江真澄の著作に添えられた図絵は、土地のようすや事物について、文章よりもより具体的にわかりやすく示されることから、真澄の著作の大きな特徴であり、魅力ともなっています。『菅江真澄全集』（未来社）では、およそ2,400図を数えることができます。

展示では、「図絵」という用語、真澄が描く目的をパネルで紹介した後、著作別の特徴（日記・勝地臨毫（しょうちりんごう）・地誌・図絵集）、図絵の特色（映像手法・図解・図絵説明文・乾拓と型押し）などを、資料とパネルを交えて紹介しました。

真澄の図絵の描き方は、旅の当初から同じだったわけではなく、蝦夷島（えぞがしま）（現北海道）への旅を境として、描法、緻密さ、日記に差し挟む数に至るまで、大きく変化しています。真澄研究の内田武志は、松前藩医の加藤肩吾との交流が、図絵の変化に大きく影響したであろうと推測しています。展示では、加藤肩吾との交流の他に、名所図会、寺社境内図などからの影響が考えられることを、資料とともに紹介しました。変化については、初期の著作である《粉本稿（ふんぽんこう）》と《けふのせばのの》、それに変化後の図絵を示しながら、変化のようすを具体的に示しました。

（菅江真澄資料センター　松山 修）

《しげき山本》（館蔵写本）
山中にある権現倉について、ズームアップの手法を使って説明している。

陸前高田市立博物館の標本レスキュー活動

東日本大震災では、激しい揺れと大津波により、東北地方の太平洋沿岸が甚大な被害を受けました。亡くなった方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

壊滅的な被害を受けた陸前高田市立博物館の収蔵資料は、地元のボランティアの方々や岩手県立博物館を中心とした岩手県内の博物館関係者の尽力により、４月下旬に運び出されました。植物や昆虫の標本には、カビの発生や腐敗が進むものがあり、一刻も早い修復が必要な事態でした。あまりに数が多かったため岩手県立博物館が協力を呼びかけたところ、全国から多くの博物館が応じてくれたのです。

秋田県立博物館でも植物標本200点と昆虫標本約500点の修復に協力しました。凍結乾燥機などの便利な設備はありませんが、手持ちの道具で工夫しました。

昆虫標本のほとんどは蛾類です。約半数は泥が付着していて、カビが発生しているものも少なくありませんでした。当初用意されたマニュアルでは、洗浄液に標本全体をつけて軽くゆすることになっていましたが、他館からの情報も参考にして、泥は面相筆で少しずつ取りました。翅が下がるなど変形があるものは整形し、乾燥剤を入れた密閉容器で乾燥させました。

学芸員間のネットワーク

今回の標本レスキューでは、学芸員同士の横のつながりとインターネットを通した情報交換が力を発揮しました。「隣り同士」の当館と岩手県立博物館は、学芸員それぞれの専門分野からお互いの収蔵庫の中身まで知っている間柄ですから、依頼もしやすく、すぐに応じることもできます。しかし、互いに離れている北海道から九州までの多くの博物館が参加できたのは、博物館同士というよりも、学芸員同士のネットワークがあったからこそだと思われます。西日本自然史系博物館ネットワークや昆虫担当学芸員協議会は普段から学芸員同士がネット上で情報交換をしています。今回、メーリングリストを通じて支援の要請が流されたところ、ゴールデンウィーク中にもかかわらず数日のうちに十分な数の受け入れ先が確保されました。各博物館で処理作業が始まると、状況報告や方法の改善の提案などが次々とネットに上げられました。行政組織を通じて文書で打診・依頼などをしていたら、これだけ短時間のうちに進められたでしょうか。普段のつきあいがあったからこそ非常事態に対応できたのだと、各地の学芸員が指摘しています。しかし陸前高田市立博物館自体はこうしたネットワークの外にあり、どのような標本があるのかは岩手県立博物館ですらよく把握していませんでした。地方博物館では自然系担当の正職員が配属されていないところも多々あります。こうした状況は、ネットワーク以前の問題です。

標本の価値

今回多くの学芸員が協力を申し出たのは、被災地のためにという気持ちはもちろんですが、標本を救いたいという意識も強かったのではないでしょうか。個々の標本の「希少性」はさまざまですが、すべての標本はそれぞれ、その時その場所にその種が存在したことを示す証拠であり、代わりになるものがないという価値を持っています。ですから、自然史標本を扱う者は、標本とそれに付随する情報は可能な限り保存されるべきものであり、人類共有の財産だと考えています。救出された標本は、被災前の陸前高田の自然について、多くのことを語ってくれるでしょう。

陸前高田の人たちにとっては、大震災で失われたふるさとのかつての記憶を伝えるものとして、さらに特別な価値があるのではないでしょうか。修復のためとはいえ、手元を離れて全国に標本が散らばるのは忍びない気持ちもあったのではないかと想像します。私たちはその気持ちもふまえて標本を扱わなくてはいけないと思います。標本がいつ、どのように陸前高田に返っていくことになるのか、まだ見通しは立ちません。その日を迎えるためにも、被災された方々の生活が一日も早く再建されることを祈ります。

（生物部門　梅津一史）

泥が付いたキシタバ。右は泥を取ったあと。

まじない歌の「不敢来」の読み

菅江真澄の書に、まじない歌として分類しているいくつかの軸装があり、その一つに、次のような漢字が並んでいます。「神代譽理誓約萬差斯喜璽迩波雷不敢来毛母能木乃茂刀」（『御製』、館蔵）。この歌は、『日本書紀』第五段一書第九で語られている伊弉諾尊の故事に由来しています。

軻遇突智神を産んだために亡くなった伊弉冉尊を黄泉の国に追っていった伊弉諾尊でしたが、醜悪な伊弉冉尊を見てしまい、そのまま逃げ出してきました。すると、後ろを八色の雷が追いかけてきました。伊弉諾尊は、近くにあった桃の樹の下に隠れて、桃の実を投げつけようやく逃げることができました。この神話には、桃が持つ邪気や悪鬼を祓うとする中国古来の考え方が反映されているとも言われます。

さて、歌の読みですが、わかりやすいように漢字を交えて書くと、「神世よりうけひまさしきしるしには、雷えこじ桃の樹のもと」となり、意味は、「神々の時代から神意が確かな証拠として、雷は桃の木には落ちない」となります。

ここで、ずっと私の頭を悩ませてきたのは、歌にある「不敢来」の読みです。

歌のもとになった『日本書紀』第五段一書第九の本文にも「不敢来」があり、岩波書店・日本古典文学大系『日本書紀』（以下、大系本とする）では、「不敢来」の読みついて「えこじ」のルビを振っています。しかし、これは通常の読み下しには見られない特別な読み方と言えます。

そもそも『日本書紀』は、720年（養老4）に漢文体で成立したものの、その読みについては伝わっていなかったため、その直後から解釈を含めた読みの研究（講書という）が行われていたといいます。すると、現代の読み下しは、千二三百年にもわたる研究史の上に成り立っていることになりますから、「不敢来」を「えこじ」とする読みは、それ相応の理由があることになります。

ところで、『日本書紀』には「不敢来」の用法は第五段一書第九にしかありません。一方で、「不敢」の用法は、「不敢来」の他に18箇所にありますから、その読み下しを大系本で調べてみました。すると、「不敢来」以外の全てが「あえて…ず」と通常の読み下しとなっています。

それでは、「不敢来」の用法と、他の「不敢」の用法ではどこが違うのでしょうか。

それは、「不敢来」が会話文で使われているのに対し、18箇所の「不敢」は地の文として使われていることです。

もう一度、第五段一書第九の場面を見ると、伊弉諾尊が追いかけてくる八色の雷に向けて桃の実を投げつけると雷たちが逃げていきました。さらに、桃の木の杖を投げて言った言葉が、「自此以還、雷不敢來」で、大系本では読み下しを「此より以還、雷敢來じ」としています。

ところが、この部分の読み下しは、小学館・新編日本古典全集本（以下、新編全集本とする）になると、「此より以還、雷敢へて来じ」となり、口語訳を「ここからこちらには、雷は決して来るまい」としています。つまり、新編全集本の「不敢来」の読み方は、大系本における18箇所の「不敢」の読み方と同じになっているのです。

大系本と新編全集本の読み下しの違いは、底本の違いと校注者の考え方によるものと考えられます。どちらが正しいとかの問題ではなく、この場面をどう捉え、どちらの言葉遣いを「好むか」の違いのように思います。もちろん、研究史に基づいたそれぞれの判断ということです。

ただ、ここで述べたいのは、真澄がどう読んだかです。これは間違いなく「えこじ」となります。

一つには、真澄がまじない歌として詠んだ歌の第四句ですので、「いかづちえこじ」の七音が適当になるからです。

もう一つには、地誌《月の出羽路仙北郡一五》に「神代より誓約まさしき験には雷不敢来もゝの木のもと」と、しっかりルビを振っていることが挙げられます。この地誌に書かれたまじない歌の直前には、「神代のみふみに」として、『日本書紀』神代編を引用して「不敢来」に「エコジ」のルビを振っています。他のルビの振り方を照合するなどすると、真澄が引用した書物（系統と刊行年）を知ることができるはずです。

なお、この地誌よりもおよそ45年前の信濃国での日記《すわの海》に、真澄はすでに同様の歌を書き留めています。そこには、「むかしよりうけひまさしきしるしにはいかづちこえし桃の木の郷」とあります。「こえし」は「こえじ」と読みますが、これだと「越ゆ」の打消推量になってしまいます。《すわの海》は、真澄の自筆本ではなく、写本が現存するだけですので、これについては「えこじ」の写し間違いと考えています。

（菅江真澄資料センター　松山　修）

わくわくたんけん室

⑳箱膳（はこぜん）と蠅帳（はえちょう）

箱膳と蠅帳の歴史について、簡単に触れてみます。

箱膳はかなり古い時代から使われていました。箱膳の用途は二つあり、一つは食器保管用具です。一人分の食器（飯椀・汁椀・皿・箸など）を入れておきました。二つ目は、食台です。蓋を裏返して使うとそのまま一人用の食台となりました。家族一人ひとりに箱膳がありました。また現在のような大型の食器棚はなく、箱膳を積み上げて保管していました。最初の変化はちゃぶ台のような小型テーブルの使用（登場は明治期）でした。これに全員の食器を並べ、床に座って食事をするという生活様式に変わります。その後、椅子と大型テーブルでの食事という生活様式(登場は昭和30年代)も現れ、箱膳は使われなくなりました。

蠅帳（はえちょう・はいちょう）もかなり古い時代から使われていました。蠅帳は戸棚の壁面を網で覆った造りのため、通気性が良く、食料の保管性に優れています。食べかけの料理や作ったばかりの熱い料理を器ごと保管することなどに使われました。冷蔵庫がない時代には必需品でした。一口に蠅帳といっても、型はさまざまで、大型のものは「鼠入らず」とも呼ばれました。初期の冷蔵庫は容量が少なくて器ごと料理を保管することはできなかったため、蠅帳も健在でした。冷蔵庫が大型化すると蠅帳も見かけなくなってしまいました。なお、卓上に被せるタイプの蠅帳は、現在も作られており、今後も使われ続けることでしょう。

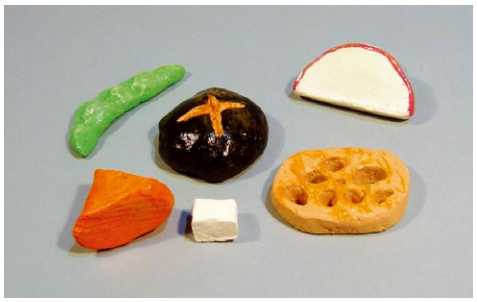
わくわくたんけん室は、『観て、触れて、体験する』がコンセプトです。ぜひ昔の生活用具を体験してみてください。

（学習振興班　戸島　毅）

<参考：『昭和すぐれもの図鑑』河出書房新社 2007年 、
『昭和台所なつかし図鑑』平凡社 1998年　　どちらも小泉和子著>

箱膳

※食材は、布や紙粘土でつくりました。



蠅帳

表紙写真説明

夏休みはじめの２週間（７月23日～８月７日）、今年４年目を迎えたアイテム「貝の標本づくり」と、２年目を迎えたアイテム「貝のマグネットづくり」を実施しました。二つ合わせて470人が製作に励みました。貝は、男鹿市船越海岸で拾い集めたもので、しっかりと水洗いをして乾燥させたものです。「貝の標本づくり」は、気に入った貝６個を選んで台紙に貼り付け、そして、およそ110の見本から貝の名前を探し出して、その名前を台紙に書きます。貝の名前を覚えてもらうことと、秋田の海にきれいな貝がたくさんあることを知ってもらうために開発されたアイテムです。標本づくりはおよそ１時間、１個の貝を貼り付けるマグネットづくりはおよそ30分で完成します。来年も同じ時期に行う予定です。

博物館歳時記

秋田県立博物館公式ホームページでは、「歳時記」として、博物館や小泉潟公園の出来事やようすを随時紹介しています。詳しい内容とコメントはホームページを御覧ください。本頁の日付は実施日、（　）内の日付は掲載日を表しています。

展　示

特別展
「粋なよそおい 雅なよそおい」
（７月２日）

ふるさとまつり広場
「七夕絵どうろう（湯沢市）」
（６月25日）

博物館教室「楽しいしぼり染め」第９回作品展（７月23日）

秋田の先覚記念室企画コーナー展「探検家・白瀬矗」（６月15日）

菅江真澄資料センター企画コーナー展「真澄図絵の特徴と変化」（７月13日）

自然展示室展示替えコーナー「空から落ちてきた石」･アエンデ隕石（4月9日）

カメラスケッチ
小泉潟公園

見ごろのハナショウブ
（７月２日）

女潟周回ジョギング･ウォーキングコースのヤマブキ（５月11日）

スイレン（６月28日）

イベントなど

入館300万人達成
（昭和50年－1975－開館以来）
５月24日（火）９：50
写真左：300万人目の伊藤さん（潟上市）、右：神馬洋館長

わくわくイベント「ミッションをクリアして、お宝をゲットせよ」（６月１日）

４月28日　博物館ボランティア・アイリスの会「おはなし会」

お知らせ

あきた文化的施設案内処
秋田の博物館の情報はこれで!

webサイトで
施設情報やイベント情報など
リアルタイムに発信中！

秋田県博物館等連絡協議会

ホームページは
あきた文化的施設案内処　検索

秋田県立博物館ニュース　No.153　2011.9.7 発行
編集･発行　秋田県立博物館

〒010-0124　秋田県秋田市金足鳥崎字後山 52
TEL：018-873-4121 / FAX：018-873-4123
E-mail：akitamus@nifty.com
http://homepage3.nifty.com/akitamus/